

書籍のご案内

チンドン屋は、お宅の方だ。

少年よ、老人よ。文化の扉を叩くがよい。

令和4年1月31日頃より、アマゾンにて販売予定。

『日本文化原論 永続思想 主体性学 一卷』

真なる調和への道 七色の虹の架け橋

(著 横山俊一) 定価 1,680 円 (税抜)



ご挨拶

1)哲学文化

1-1 中大局観

広告と金融、サービス経済性の進行や自然との距離感が広がる人口性の高まる生活様式の進行から、頭と体の分断が広がり感性の歪みと破壊性を招く事に対し、適当な人間像と生態観を引き出し根幹原理性と大局観の適正と個別特定現象の適正に連ね崩れの補正と稼働を求める発想と感性と創造が産まれる。

1-2 根源性・根幹性

生命観が歪化し無機質合理の性格が強まり、感覚的効用に偏し感性の歪性を生じさせることや、抽象観念と粗雑な一様性の判定や評価により外界を強引に支配従属させる強権等という病理現象が産み出される事への適当な施策が起こり健全な根本原理を存続させる態度が産まれる。感性と観念と精神と身体の間関と習慣に見る健全性という根本的な観点と適正な基準性の認識が萎み、あまりに地から離れた歪性を拡大させるような成長軌道に外れる事への警戒と重力性を備えた長期基準概念や世界観が産み出される。

1-3 根本原理と対象性の適用

「産業経済の高度化、イノベーション」「保守やリベラル」「ジェンダー」などという概念や志向、ビジョンについて根本原理との対照をもって中味の悪性を招かぬ長期法則が作動する。又は効率と非効率といった生の粗雑を回避する基準概念が求められる。人間と生態の根源の狂う成長軌道に陥らぬ長期原理と世界観を模索し作る習慣が形成される。一部の特殊技術が異様な成長を見せ根本且つ大局の適正を破壊すると短期利益の高まりと長期利益を失う相関が確認される。

1-4 根本基準と分化と統合

精緻性と専門性の欲求を産み、対象の分化と分散性が起こり局所の多産性が進む。総合性や統合性の欲求を産み、対象の集約性を産み抽象性と中身の空疎性

の傾向を産む。横と縦の整合の高まる基準概念を引き出し両面の偏りについて適当な要素と制御の創造法則を産む。芯や柱になり得る軸と全体が構成され両極的な歪性への適当な過不足と評価の認識に連なり適正な基準と実現の普遍的不変の創造に向かう。根本基準は根源と根幹と総枠観から形成される。

根本且つ広義の世界観																	
分母観		憲法観		社会観		生態観		学問		日常		学術		基礎			
生態		三権分立と統合		永続 平和 安定 成長		教育 金融		産出 狭義の世界観 短期・中期・長期 具象・準抽象・抽象 悪い事・両面因果・良い事 個別特定全体、局所構造的性質		社会 理科		法規 制度 衣食 住		心理 生物 物理		観念	
社会																精神	
自然																	
創造				立憲 主義 法の 統治		政治 経済		根幹 活動法則 感性と観念と精神と身体の 相関と習慣		国語 算数		言葉 価格 収支		言葉 概念 数値 算式		身体	
生命 人間				主権 民主 人權		狭義 哲学 文化		根源 生滅不可分性と 最良の生の導出		倫理 道德		健康		感性		感性	

1-5 基軸性・標準性の導出と制御性

横軸と縦軸の整合の崩れを招く創造習慣に及ぶと生命観や感性の歪性や異常の認識を産む。軸と重力と総枠の崩れた質実性を産む。集中と定型の生産から根本性と大局観の希薄化した偏狭と部分最適の弊害を産み、他の領域へ関心が起こり自他の長短性の認識と相互補完や協業の感性が出現する根本原理性が求められる。

1-6 生態：樹木

根本且つ大局や縦横の整合する観念が希薄化すると個々の分散と縦割りが強まり、統合性と周期性の弱まる歪な領域性を生む。変わりづらい標準性の概念を起こし内外へ提起する作用が要る。良好な領域性を存続する根本原理が作動する。誰にも、身近な「樹木」等という対象を取り上げ人間と生態の基本原理を概念に起こし各種対象の応用尺度に及び具象や抽象の整合を図る方法が示される。憲法等という抽象性の概念と皮膚感覚の生活観が身近な連なり実感が進み健全な自他との相関と習慣と人間を存続する。

1-7 狭義と広義

変らぬ人間と生態の良質への答えが定まり普遍的不変の観念を問い形に纏め、定常性の基準の上に個別特定と全体性を作る規則性に広義の普遍的不変の観念を産む。適当な狭義性の産出に在って広義性を実現する相関に至る。良好な狭義の哲学文化領域を求める態度が進む。

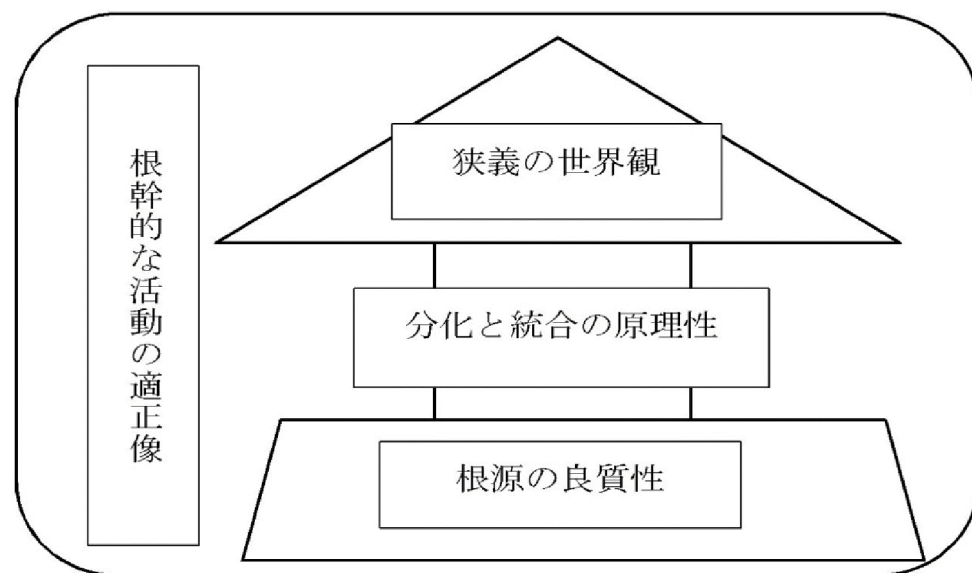
1-8 言葉や概念の特性

言葉や概念は広く多くの人々との価値基準性を共有する方法として有効な形を産む。直接的な身体的な因果や感性の出現に対し言葉や概念の形成と提起と伝達は間接の因果と広がりやを産む。健全な根本性を反映した具象と準抽象と抽象の連なる大局観を引き出し実際化する具体的方法や方法を産む。「納得感、共感性、確かさ」を長らく得られるような世界観を問い作る創造性が望まれる。

1-9 主要な役割

狭義の哲学文化は自己の手足から直接の因果を産むというよりも、確かな概念や構図を明瞭に起こす事が主要な役割と解される。領域のあるべき姿を現す事

が要る。公性の安定した観念が備わり公性と私的性の矛盾の少ない軌道を作る事に及び長らく良好な生態を実現する。狭義の世界観の導出と根幹的な活動の適正像と分化と統合の原理性を引き出し、過程と定常的な習慣と産出と制御の総体的な体系を産む。こうした体形から根源の良質性が存続する。



1-10 哲学文化基盤・伝統文化性

卒業した学校がどうのこうのと言ったり、金品を見せびらかせて外界からの求心力を作る様な性格に陥ると、二次三次の基準性と相対比較の高まる哲学文化の不在と歪な部分最良や恣意性と利己性が広げられる。私と公の軋轢や対立が強まるか。公性の形骸化や崩壊の事態を招く。強引な力で空間を統制する暴力的な統治や詐欺や盗み、誤魔化しを多用する不良が進む。物理依存の激しい生態の性格を広げ深める。堂々と領域のあるべき姿を明示し広く内外との共感や納得を高め稼働に及ばせる力を投じる態度と習慣にあって、健全な人間と生態の軌道を存続する。情緒不安と混乱の社会と生態を強める事の無き健全かつ盤石の哲学文化に長期利益性を生む。病んだ村社会と三流の文化で満足するかどうか。根本的な志向の異同が産まれる。

文化慣習

1)縁起物制作と思想形成

幼少の頃より縁起物制作販売に従事し直近の10年間は文化思想の執筆に専念し、この度『日本文化原論 永続思想 主体性学』と題する著書を纏めるに至りました。「家内安全と商売繁盛と健康長寿」という基本祈願に対しこれを遂げる方法的な思索と施策が続き、ある程度の見解となり「集約的な思想」と「主体性の一般法則」という形を整備しご案内申し上げます。広く万人性の理念と実現の方法を提起する内容です。2014年5月発行の「日本文化原論 真なる調和への道 神からのブラボォー」から改善を重ね本書の形成に至ります。多くの人々から良い力を賜り衷心より感謝申し上げます。

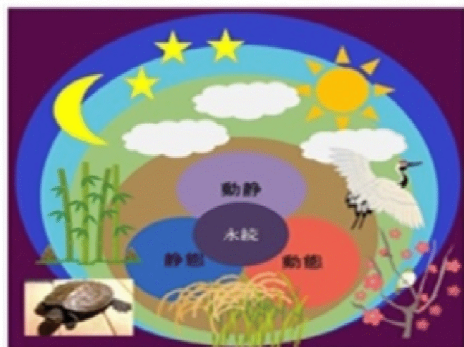
1-1 因縁生起

1 吉凶の前触れ。兆し。前兆。「縁起がよい」2 物事の起こり。起源や由来。3 社寺・宝物などの起源・沿革や由来。また、それを記した書画の類。「信貴山(しぎさん)縁起絵巻」4 仏語。因縁によって万物が生じ起こること。出典：デジタル大辞泉(小学館)



2)定番と変則

飾り熊手は「家内安全・商売繁盛・健康長寿」を祈願し購入される縁起物となります。どのような部材をどのように配置し一つの世界を表すか。祈願を遂げる方法を構想し一纏まりの形へ具象化されます。個々の施策や施策の蓄積から定番が産まれる。短調なマンネリを回避するのに衝動的な色合いを刺激し変則形を作り緊張と緩和の周期をもって長らく良好な人間と生態を遂げる。いつの間にか変則が主流になり強い刺激で需要を集める供給が高まると定番を喪失し熊手自体の生命力が瘠せる。外界の短期的欲求を満たす要望に従属した形に下落する。外界の要望に偏った需給構造が進み自己の側の価値観が弱まり需要に振り回され内包性を失い領域の衰退を招く。出来る限り定番を守る意識が存続し定番を引き立たせる変則との相関を生む。根源には真の良質を求める感性が宿り全体と特定の構図を生む。縁起物制作という領域も他領域からの影響を多分に受け本来的な中枢が壊れつつある。自領域に留まらず他領域への働きかけが求められる。江戸時代から続く酉の市と縁起物という日本の長期様式の原理が産みだされる。感性や精神が思想を産み外形的な姿に現れる。間接的な領域へ対し根源的な面から適正を遂げる力を生む。祈願性に対し飾り物というハード上の効果性のギャップが生まれる。ギャップを縮める発想から思索が重ねられる。祈願を遂げる思想や世界観の探究と導出という力が産まれる。



定番熊手



変則熊手

3)神棚と鏡

父や祖父の代から家には神棚と仏像を備え私も自然に習慣が継がれた。神棚には鏡が配置される。鏡に「自己の顔を映し自己自体を問いなさい」等という暗黙的な指令に伝わる。なるほどそうかとも感じ取られる。しかし、宗教を主導する立場においては鏡の中味を示す事に適正がある様に感じられる。意図する人間像や世界観を導出し自他との共感を促進させる普遍的不変の構図を集約し表す感性と作為にあって堂々とした生命を作る姿が進む。自己と外界を含む世界のあるべき姿を描き自他という特定領域を生む事について普遍的不変の観念と特定観の性格と配置を付け自他の客観的な観測や評価と作為に連なる。自他の特徴を含む全体像を導出し自他との良好な同一基盤的全体性の概念と各種特定観の認識が進み健全な創造性と社会性と生態の軌道を生む。自己の現況性を掴みつつあるべき全体の方向感を得て、反省と課題の抽出と改善の施策を引き出す鏡の中味を明示することに、思想家や理論家の主要な役割を生む。

「鏡を置いて自己を問え」という態度に留まると、どこか傲慢の心象を生む。人間と生態の良性と永続という万人的な集約理念とそれを遂げる方法論を探究し一目で伝わるように簡潔に纏め参拝者に提起し良ければリピートという再生産が続く。主導的な立場を望む場合に共通する基本作法が投じられる。立憲主義なる概念に通じるように思われる。主導性と検証性と改善の熱意の存続する習慣に至って健全な感性と生命観が出現する。怠慢と傲慢の強まる寡占という非人間性に陥らぬ健全な様式が整備される。建造物等のハード性に偏り権威付けを求める割合の増す事の無いソフト性に重心を備え適当な割合感を持つて心身と生命の健全性を存続させる永続思想が実践される。

(著者履歴紹介 p 467)

日本文化原論 永続思想 主体性学 全容

1)永続思想と主体性学

人間と生態の健全と永続という万人集約性の理念の導出と実践を図る思想体系を産む。主体性原理と具象化し精査する。変らぬ土台的基礎と全体性を支配する。

動的 静的	永続思想
	主体性学
特定領域性	動静
・ 日本文化	真なる調和性
・ 他の文化	七色の虹の架け橋

2)執筆過程と産出性

文章執筆は後半から前半へ向けて思索と施策と改善を重ね更新が成されます。前半部分へ行くほどに最新のな基準概念が形成されます。

「人間性と生態観」に集約されます。

一 卷	まとめ	令和3年12月
	一部	
	二部	
	三部	
	四部	
	五部	
	六部	
	七部	
二 卷	八部	
	九部	
	十部	
	十一部	
三 卷	十二部	
	十三部	
	十四部	
	十五部	
	十六部	令和3年6月頃

一卷
A5 497 ページ
195.012 文字程
白黒 420p
カラー 77p

3)全体構成図



二部

一編 要約『日本文化原論永続思想主体性学』

一章 根本原理性 二章 総論 三章各論

二編 原理の確立と実践

一章 主体性と領域性の一般原理

二章 哲学文化政策実践例

三部

一編 要点 日本文化原論 永続思想

一章 哲学文化政策概略

二章 具体の施策

二編 哲学文化観

一章 抽象原理性 二章 具象的観点

三編 主要産出成果物

一章 概念

1)背景

2)概念図

二章 科目構成

1)根本的観点

2)創造力の包括観と主体性像

3)授業概要 4)授業計画

産
出

四部

一編 初動と普遍と不変の基準性

二編 要旨 三編 文化人への道

五部

一編 根本性 二編 各論

六部

一編 基本趣旨 二編 伝統文化

三編 永続思想と主体性学

四編 生の健全性と永続性

七部

一編 普遍的不変性の探究 二編 生態原理 1

三編 生態原理 2 四編 生態原理 3

八部

一編 集約 二編 思想・人間性

三編 世界観・生態系 四編 活動法則・動静観

産
出
過
程

図表

著者履歴紹介

あとがき

目次

ご挨拶	1		
1)哲学文化	1		
文化慣習	5		
1)縁起物制作と思想形成	5		
2)定番と変則	6		
3)神棚と鏡	7		
日本文化原論 永続思想 主体性学 全容	8		
1)永続思想と主体性学	8		
2)執筆過程と産出性	8		
3)全体構成図	9		
4)目次	12		
まとめ		29	
人間性と生態観	30		
一章 狭義の哲学文化	30		
1)特定観点の限定と創造性	30		
2)問題現象	30		
3)施策性	31		
4)哲学文化政策	34		
二章 表現や創造の前段的基準	41		
1)歴史と理論と実践	41		
2)創造原理	43		
三章 総論	46		
1)個と全体	46		
2)根本原理と対象性	46		
3)抽象概念と根本概念	47		
四章 各論	49		
1)根源性：死生観と最良的生	49		
2)産出性	49		
3)根幹性：感性と観念と精神と身体と習慣			
	51		
4)全容観	52		
一部		53	
編 哲学文化政策	1	54	
一章 要点	54		
1)今日の潮流と適正化	54		
2)人間観	54		
3)概念形成と適用	57		
4)科目構成	58		
二章 集約	60		
1)健全な民主主義と自由主義	60		
2)根本且つ全体性の概略	63		
3)社会学	65		
4)集約概念	67		
三章 総論	68		
1)現況認識と改善案	68		
2)産出性	70		
四章 運用面	77		
1)哲学文化概念の形成と提起	77		
2)根本的な性質	78		
二編 哲学文化政策	2	80	
一章 総論	80		
1)学びの初動	80		
2)良好な習慣と産出	82		
3)分析と適正策の導出	83		
二章 具象論	85		
1)普遍的不変の原理性	85		
2)哲学文化システム(健全な生命・生物・領域)		88	
三編 哲学文化政策	3	94	
一章 総論	94		
1)対象の限定と問題点	94		
2)普遍的不変性の基準観の導出	94		
3)根本原理の精査性	96		
4)知的体系の確立	96		
5)基準と自己への適用	97		
二章 具体の展開性	98		
1)特定観点の導出	98		
2)基礎付けの作用	98		
3)性質の劣化・人間の物化	99		
4)良好な生物や生命の生産	99		
5)動静の規則性	100		
6)堂々と開かれた秩序・人間と生態の健全と永続		101	
三章 集約性	102		
1)哲学文化システムの確立	102		
2)根本原理性	102		
3)システム化	102		
二部		103	
一編 要約 日本文化原論 永続思想 主体性学		104	
一章 根本原理性	104		
1)感性と能力の相関	104		
2)具体の運用	104		
3)三者の相関	104		
4)心身と観念と習慣、動静概念と規則性	104		
5)生態概念	105		
6)樹木・林・森・山	105		
7)自存と他存、自立と協働、自律と共生	105		
8)基礎と専門と全体、普遍的不変性、観念性	105		
9)健全な能力観	106		
二章 総論 人間と生態の健全と永続の思想	111		
1)関心と観点の限定	111		
2)全容観	111		
三章 各論	114		
1)過程(領域化と形成過程)	114		
二編 原理の確立と実践	118		
一章 主体性と領域性の一般原理	118		
1)利益概念	118		
2)自他、公私、内外	118		
3)短期効用性の高まり	118		
5)根源且つ根幹	119		
6)画一性・量産性・統合性	119		
7)生物観、物理性、心理性、観念性	119		
8)個別政策と政策の全体構成	119		
9)思想と世界観と活動法則	120		
10)言葉や概念、思考	120		
11)制御性・自律性・文化性	120		
13)主体性と領域性の一般原理	121		
二章 哲学文化政策実践例	122		
1)問題点の特定	122		
2)改善案	122		
3)具体的改善の進行	123		
三部		125	
一編 要点 日本文化原論 永続思想		126	
一章 哲学文化政策概略	126		
1)個別的原因	126		
2)特定の因果・全体的因果	127		
3)根本原理・総枠性	128		
4)普遍的不変の価値観	128		
5)基準性と運用	129		
二章 具体の施策性	130		
1)関心の焦点	130		
2)思想・世界観・活動法則	132		
3)分母的世界観	135		
4)集約性・総枠観	136		
5)当該創造性	138		
二編 哲学文化観	139		
一章 抽象原理性	139		
1)因果・周期・領域・持続	139		
2)統合と分化と制御	139		
3)動静の適正	140		
4)根本性と特定領域と全体性	141		
5)エネルギー均衡・表裏の一致・健全な生命	141		
6)動静観と規則性	142		
二章 準抽象観点	143		
1)各種観点	143		
2)動静	144		
3)適正要素	144		
4)長期法則	146		
三編 主要な産出・成果物	147		
一章 概念	147		
1)背景	147		
2)概念形成	148		
二章 科目構成	159		
1)根本的観点	159		
2)創造力の包括観と主体性像	160		
3)授業概要	161		
4)授業計画	163		
四部		167	
一編 初動と普遍と不変の基準性	168		
一章 総論	168		
1)根本且つ総枠性	168		
2)根本且つ総枠性と個別特定性	171		
二章 各論	172		
1)万人的同一性	172		
2)人間像と生態像	173		
3)開かれた秩序	176		
4)人間と生態の健全と永続	177		
二編 要旨	179		
一章 哲学文化政策	179		
1)人間と文化(根本理念)	179		
2)人間と生態の健全と永続(全体・総枠性)	180		
3)動静概念(根幹と総枠)	182		
4)生態観と各種対象性(根本性と応用)	185		
5)社会観、広狭の哲学文化観	187		
6)まとめ	188		
二章 哲学文化原理	191		
1)現象と判断と行為性	191		
2)予めの尺度	191		
3)成長過程と段階	192		
三編 文化人への道	194		
一章 まとめ	194		
1)纏め解説	194		
二章 総論	196		
1)製造物責任	196		
2)根本的観点	196		
3)過不足性の測定と認識	196		
4)適正化の作為	197		
5)思想と世界観と活動法則	197		
6)局所性と構造性と性質	198		
7)成長過程と習慣(萌芽・成長・安定・成熟)		198	
8)普遍的不変性	199		
9)広狭の哲学文化観	199		
三章 産出	200		
1)動態性：運用性	200		
2)動静概念と規則性	201		
3)特定生産性：狭義の哲学文化	201		
四章 実践施策	202		
1)産出までの過程	202		
2)真なる調和への道 七色の虹の架け橋		202	

3) 静的概念性：根本且つ全体・総枠性の観念導出	204	5) 根本原理と対象性	251	三章 人間性・社会性	308	1) 直接的因果	336
		四章 哲学文化政策	253	1) 人間観	308	2) 間接的因果	336
五部	209	1) 根本基準	253	2) 生態観	308	3) 原理性・集約性	337
一編 根本性(根源根幹産出総枠)	210	2) 内的歪性の表面化・病んだ資本主義	253	3) 生態観の適用	309	四編 生態原理	338
一章 人間と生態の健全と永続性	210	3) 不平等性と是正の自然律	254	四章 動静観	312	一章 哲学文化政策	338
1) 領域観(人間と生態の健全と永続)	210	5) 人間と生態の健全と永続の思想体系の導出と稼働	255	1) 動態性；思想性；過去と未来性	312	1) 物質依存型の体質の弊害	338
2) 人間性(内包性)	211	6) 哲学文化政策	255	2) 静態構造；世界観；個別政策と政策の全体	312	2) 人間と生態の健全性と永続性	339
3) 生態観	213			3) 動静の適正；活動法則	312	3) 理論家・思想家	340
二章 根源性 七色の虹の架け橋	215	五章 領域の一般法則性	256	4) 概念図	312	二章 健全な感性	342
1) 具象的原理性	215	1) 全体構成	256	五章 真の世界標準	314	1) 哲学文化の質実	342
2) 抽象原理性	217	2) 纏め	257	1) 根本観点と現象性	314	2) 人間観・生態観	344
三章 総枠性 広狭の哲学文化観	222	3) はじめに	264	2) 哲学文化性	315	3) 思想・活動・世界観	344
1) 理念性	222	4) 歴史と理論と実践	265	3) 真の世界標準	316	4) 運用性	345
2) 現況性	223	5) 狭義の哲学文化観	266			5) 持続的探究と動静	346
3) 方法性	224	6) 現代と未来	268			6) 纏め	348
二編 各論	225	7) 哲学文化政策	272	七部	317	三章 習慣性・周期性	349
一章 基準性の導出	225	二編 伝統文化	274	一編 普遍的不変性の探究	318	1) 学術・創造力	349
1) 思想・世界観・活動法則	225	一章 問題点	274	一章 総論	318	2) 初動的基礎	349
2) 万人の同一性の世界観	226	1) 根本性の崩れ	274	1) 情報、知見・知恵、見識、	318	3) 普遍的不変性	350
3) 過程と産出	229	二章 改善案	277	二章 特定創造性と根拠	320	4) 概念形成の作用	350
二章 対象の選定と観測評価分析	230	1) 哲学文化	277	1) 哲学文化性	320	四章 活動法則・規則性	350
1) 個別特定現象と調和性	230	2) 伝統文化と世界標準	282	2) 思想・世界観・活動法則	322	1) 需給性、生物物理と心理感性	350
2) 美観（調和性）	232	3) 根本原理の探究	284	3) 基礎基盤性科目	323	2) 言葉や概念	350
3) 調和性の崩れ	234	三編 永続思想と主体性学	285	二編 生態原理	325	3) 歪性・不健全性	351
三章 適正策と稼働	236	一章 概論	285	一章 生態原理	325	4) 創造力の包括観	351
1) 具象性と展開	236	1) 実施性と歴史性	285	1) 総論	325	5) 普遍的不変性の尺度(根本且つ全体性)	351
		2) 理論性	287	2) 個と集団	325	6) 習慣・法則	351
六部	237	3) 実践性	289	3) 人間性	325	五章 基礎基盤性科目	352
一編 基本趣旨	238	二章 概論	291	4) 根本性と対象性	325	1) 思想性	352
一章 普遍的不変性	238	0) 長期性の適正	291	5) 全体最良性	326	2) 世界観	352
1) 観点の特定	238	1) 個別特定現象	291	6) 分化と統合	326	3) 活動法則	352
2) 適正基準と稼働	239	2) 全体性と根本性	291	7) 概念図	327	4) 総合	353
3) 根本基準性	240	3) 普遍的不変性の探究	292	二章 実践性	328	5) 概念図	354
4) 真なる普遍的不変性	241	4) 概念精査	293	1) 例示	328	6) 例示	359
二章 広狭の普遍的不変性	242	5) 哲学文化性の作用	295	2) ビジョンの導出	329	7) 纏め	363
1) 個別・特定・全体・根本	242			3) ビジョン集約と中味の適正	331	八部	367
2) 哲学文化性	242	四編 生の健全性と永続性	298	三編 生態原理	332	一編 集約(思想・世界観・活動法則)	368
3) 自存性過多の弊害と対策	243	一章 総論	298	一章 永続思想と主体性学	332	一章 総論	368
4) 多様性と画一性の適正	243	1) 思想性・世界観・活動法則	298	1) 具象的観点と対象性	332	1) 体と頭と感性の相関と習慣	368
5) 根本性の劣化喪失	243	2) 人間自体の欲求や需要の健全性	299	2) 間接的因果と対象性	332	二章 各論	370
6) 広狭の普遍的不変性	244	3) 基礎基盤性科目	299	3) 全体性の因果と集約性	333	1) 実務と歴史と理論	370
三章 根本原理性	245	4) 哲学文化性と科学技術性	300	4) 根本性の因果と創造性	334	2) 個別現象と抽象原理と普遍的不変性	370
1) 活動法則と性質	245	二章 人格観	302	5) 今日的な状況	334	3) 抽象性と準抽象性と具象性	370
2) 観測と認識	245	1) 教育の目的	302	6) 世界観の集約性	335	4) 根本律と対象性	371
3) 根本原理の解明と集約基準の導出	246	2) 根本原理と適用	304	7) 動静概念と規則性	335	5) 根本基準の鮮明性	371
4) 基本概念	247	3) 個別現象と特定領域性	306	8) 良好な内外性	335	6) 人間の物理化と対処と予防の施策	371
		4) 原理性	307	二章 世界観	336	7) 人間像と生態系	371
						三章 各論	373
						2(具象性)	373

1)特定現象性	373	4)静的概念	447
2)健全な感性と思考と作為性	373	5)他	456
3)一般原理性の高まり（創造法則性）	374	キーワード	458
4)普遍的不变の高まり（根本原理の確立と適正化）	374	1)全体構成	458
5)思想・世界観・具体策（活動法則・動静概念）	375	2)根源的	459
6)概念設計と提起	376	3)基盤的	460
7)根本性と校正や校閲	376	4)日常的	462
四章 各論 3(抽象原理性)	378	5)広がり	463
1)永続思想と主体性学	378	6)根源・根幹・総枠	466
2)生態観（静的概念と動態性）	381		
二編 思想・人間性	384	著者履歴紹介	468
一章 総論	384	沿革・自己紹介	468
1)はじめに	384	1)プロフィール	468
2)人間と生態	385	2)縁起物と思想	470
二章 各論	389	3)日本文化原論・執筆の軌跡	476
1)観点の限定	389	4)前作と本作	479
2)理論導出	391	5)各種写真	480
3)施策体系性	394	あとがき	490
4)広狭の哲学文化観	395	1)普遍的不变性	490
三編 世界観・生態系	406	2)幸福感と真の永続思想	490
一章 総論	406	3)創造性と伝統文化性	491
1)思想と過程と世界観	406	4)回覧	494
2)少子高齢化	406		
3)人間と生態の健全と永続	407		
4)根本原理と応用	407		
5)社会の中大局観	407		
6)根本理念と適正稼働	408		
7)広義の哲学文化性	408		
二章 各論	409		
1)広狭の哲学文化	409		
2)主体性学	410		
四編 活動法則・動静観	413		
一章 総論	413		
1)基礎基盤性科目の充実	413		
2)理念・信念・感性	414		
3)自存と他存の相関	416		
4)根本基準と特定領域性	419		
二章 各論	425		
1)動静観	425		
2)時代状況と改善の方途	431		
3)思想・世界観・学術体系	435		
図表・キーワード	442		
図表	442		
1)総合	442		
2)動静概念	443		
3)根本性	445		

プロフィール

幼少の頃より縁起物制作と販売に約 35 年間従事し、その間に会社勤務を 8 年間程経ながら、平成 14 年(2008 年)1 月に縁起物制作を専業にして約 10 年経過し、平成 23 年(2011 年)12 月頃から文化論の執筆が習慣となりました。平成 26 年(2014 年)5 月に、「日本文化原論 真なる調和への道神からのブラボォー」を出版し令和 3 年 11 月(2021 年)に「日本文化原論 永続思想 主性学 真なる調和への道 七色の虹の架け橋」と題し概ね文化体系が整い人様に広くご案内を進めて良いものと考えました。祖父母や両親は既に他界しましたが縁起物作りの精神性は持続し今日に至ります。三世代の活動成果をご覧くださいますと幸いです。

氏名 文化活動家 横山俊一(よこやましゅんいち)



<ウェブ上の活動記録>

ワードプレス <https://syunichiyokoyama2013.wordpress.com/>

ツイッター https://twitter.com/bisui_nihon

フェイスブック <https://www.facebook.com/bisui.shobo/>

はてなブログ <http://bisuinihon.hatenablog.com/>

3)日本文化原論 -執筆の軌跡

平成 23 年 12 月頃より令和 3 年 6 月に至る約 10 年の執筆活動です。

2011 年～2016 年

大項目	中項目	ページ数	価格	執筆日	発行日 発行所 ISBN
はじめに	入門編 パラエティール編	A5 55p A5 28p	0 円	2011. 12	978-4-9906416-0-3
真なる調和への道 シリーズ	I 生存と自由の拡大	A5 71p	480 円	2012. 2	2017. 3 美粋書房 978-9906416-1-0
	II 健全性	A5 93p	520 円	2012. 3	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-2-7
	III 人類の教科書	A5 245p	650 円	2012. 5	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-3-4
	☆取り纏め版	A5 43p	400 円	2012. 7	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-4-1
活動の研究 シリーズ	I 活動の研究	A5 138p	430 円	2012. 10	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-5-8
	II 活動の研究	A5 30p	320 円	2012. 11	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-6-5
	III 活動の研究	A5 41p	340 円	2012. 12	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-7-2
	☆活動学	A5 86p	480 円	2012. 9	2017. 3 美粋書房 978-4-9906416-8-9
日本文化原論 シリーズ	I 神からのブラボォー	文庫 311p	760 円		2014. 5 ブイツーソリューション 978-4-434-18854-1
	II 七色の虹の架け橋				
	一編生産性の具象	A5 60p	380 円	2014. 5	2017. 3 美粋書房
	二編主体	A5 49p	380 円	2014. 6	2017. 3 美粋書房
	三編人間学の要諦	A5 75p	430 円	2014. 7	2017. 3 美粋書房
	四編集約編	A5 72p	470 円	2014. 8	2017. 3 美粋書房
	五編総論	A5 79p	480 円	2014. 9	2017. 3 美粋書房
	六編基礎	A5 57p	430 円	2014. 10	2017. 3 美粋書房
	七編活動観念	A5 49p	430 円	2014. 11	2017. 3 美粋書房
	八編主体性学	A5 56p	450 円	2014. 12	2017. 3 美粋書房
	九編生産原理	A5 35p	380 円	2015. 1	2017. 3 美粋書房
	十編動性概念	A5 50p	430 円	2015. 2	2017. 3 美粋書房
	十一編真理の探究	A5 69p	460 円	2015. 3	2017. 3 美粋書房
	III 洗練集約版	A5 80p	793 円		2017. 2 美粋書房
	IV 人類永続への方途	A5 40p	880 円		2017. 2 美粋書房
	V 永遠の動態という 静態原理	A5 168p	1145 円		2017. 3 美粋書房
目録	全著作の経過と体系	A5 44p	570 円		2017. 3 美粋書房

2017 年

大項目	中項目	ページ数	価格	執筆日	発行日 発行所 ISBN
VI 神からの太鼓判 シリーズ	全五編	A5p1-p748	1,680 円	2017. 7	
	一編はじめに	B6 p1-394p			
	二編 集約 思想	p395-p487			
	三編 総論 1	p488-p553			
	四編 総論 2	p554-p626			
	五編 総論と各論	p627-p748			
VII 永続思想と文化 政策シリーズ	全五編	B6 p1-p798		2017. 8	
	一編	B6 p1-p226			
	二編	p227-p338			
	三編	p339-p491			
	四編	p492-p617			
	五編	p618-p798			
講義版 (全七編)	全七編	p1-p797		2017. 11. 3	
	集約編	p1-p98			
	一編	p99-p191			
	二編	p192-p261			
	三編	p262-p420			
	四編	p421-p466			
	五編	p467-p561			
	六編	p562-p789			

2018 年

主体性学		全七編		2018. 1	
文化政策		全十編	A5p1-P803	2018. 3	
		要旨	A5p1-P31	2018. 5	
真の平等と永続の 実現へ向け		全十一編	A5p1-p366	2018. 6. 23	
真なる調和への道		全五編	A5p1-p554	2018. 8. 18	

2019 年

主体性学 9 編				2019. 1. 15	
日本文化原論 3 編				2019. 2. 7	
永続思想 12 編				2019. 3. 24	
永続思想 2 部				2019. 4. 9	
永続思想 13 部				2019. 5. 25	
永続思想 9 部				2019. 7. 15	
主体性学 10 部				2019. 8. 9	
主体性学 5 部				2019. 8. 29	
主体性学全四巻				2019. 8. 29	

2020 年

日本文化原論永続思想		A5 358p	2020. 1. 13	
日本文化原論永続思想		A5 185p	2020. 2. 11	
日本文化原論永続思想		A5 1086P	2020. 10. 7	
日本文化原論永続思想		A5 379p	2020. 12. 24	

2021 年

日本文化原論永続思想		A5 798p	2021. 4. 19	
日本文化原論永続思想		A5 525p	2021. 5. 21	
日本文化原論 永続思想 主体性学 真なる調和への道 七色の虹の架け橋	纏め	A5 127p	2021. 7. 1	
	一部	A5 163p		
	二部	A5 260p	2021. 7. 1	